

第二次満蒙挙事について

山 本 四 郎*

The Second Manmo-Kyoji

Shirō YAMAMOTO

(1972年9月30日受理)

は し が き

1911年(明治44)10月に辛亥革命が勃発し、清朝の形勢が日に不利になると、清帝の蒙塵を予想して、清朝の故地満州(東三省)に満州・蒙古両民族の国家を樹立しようとする宗社党が中国にあり、これと呼応して独立国家の樹立を援助し、日本の勢力を扶植しようとする川島浪速らは、革命の混乱に乗じて、積極的に策謀した。この動きは、政府(西園寺内閣)の手によって抑圧された。これが第一次満蒙挙事である。川島らは、その企図を断念せず、1913年(大正2)ころから、またまた活動を開始した。この運動は、政府首脳・外務省・参謀本部・関東都督府・現地領事など、種々の意見が出て極端な不統一の情態を暴露し、袁世凱の帝制野望・第三革命の勃発・袁の憤死などの中国情勢もからみ、二転三転して、結局16年7、8月ころに中止される。その経過については、すでに栗原健氏の研究もあるが¹⁾、本稿ではこの研究に依拠しつつ、他の資料により述べてみたい。

筆者は、かつて日露戦争以後、元老が国内諸勢力を統合していた情態が維持できなくなって、体制の分裂が顕著になってきたことを指摘しておいた²⁾。また井上清氏も軍部の形成を論じ³⁾、軍部がまだ、独立で政府を牽引してゆく段階に達しない時期から、やがて昭和に入って強力になってゆく状況を分析された。本事件は、このような観点からも、興味ぶかい材料を提供する。ただし本稿では、紙数の関係上、十分この点に言及しえないことを、予じめお断りしておく。なお資料としては、「寺内正毅文書」、「山県有朋文書」など国立国会図書館所蔵のもの、および早稲田大学所蔵の「大隈重信文書」を多く用い、それぞれ「寺内文書」等と略称した。両図書館および関係館員に厚く御礼申上げる次第である。

1. 政府の方針決定前後

行論の必要上、栗原氏の叙述を要約しておこう。川島浪速の運動再開は、第1次山本内閣下であり、これに反対していた外務省の阿部政務局長は13年(大正2)9月に右翼の1青年に暗殺され、小池張造が後任となった。14年4月に大隈内閣が成立する。翌15年1月の対華21カ条要求で、中国の対日与論は悪化する。ついで大浦内相事件(選挙にからむ瀆職事件)で内相は辞職、与論の非難をあびて、内閣もいったんは総辞職するが、これは、いわゆる「狂言辞職」で、スジを通そうとする加藤高明外相らを見捨て、改造内閣が成立したのが8月のことである。ついでにいうが、この改造内閣は「昼すぎ内閣」とか「早稲田内閣」とか評され、大戦景気と山県派の後継首班候補難から、なお一カ年ほど存続する。しかしその政治力は決定的に低下した。この内閣下の訓令や指示はきわめて曖昧であり、現地を混乱させたことは、のちにもみるとおりである。外相の辞職で大隈が一時兼摂し、1月に石井菊次郎が外相、幣原喜重郎が次官に就任する。

* 史学研究室

いっぽう中国でもこの頃、袁世凱の帝制問題がおこり、これに反対して南方派が12月に第3革命をおこした。日本では参謀本部が海軍を引きこみ、反袁運動を展開すべく、政府に圧力を加え、政府部内でも尾崎行雄法相らが同調する。

明けて16年（大正5）1月は大隈爆殺未遂事件⁴⁾、2月は反袁の氣勢をあげる対支有志大会があり、政府が対華強硬策を閣議で決定したのが3月7日のことである。

いっぽう、前年春から動き出した川島浪速は、蒙古騎馬隊の一首領^{バフチヤンフ}バフチヤンフを動かし、宗社党（中心は肅親王、廃帝溥儀の叔父）と呼応せしめようとし、青柳・木沢・入江ら予備役将校、柴四朗（『佳人の奇遇』の著者として有名）・大竹貫一兩代議士、押川方義^{まさよし}、五百木良三（大陸浪人）らの政客も参加した。押川方義（1849～1928）は大学南校に学び、のちキリスト教伝道に従事して仙台教会・東北学院を創立、また大日本海外教育会を起し、朝鮮に京城学堂を開き、鉱業にも従事した。次の1917年、20年には代議士となった（犬養系）。このグループが動き出したのが、閣議決定の前後である。

当時の滿蒙挙事に対する態勢は、次のとおりである。

- (1) 参謀本部一田中義一次長の下に福田雅太郎第2部長が担当し、小磯国昭少佐を現地へ派遣、かつ、現地総指揮者として大陸事情に委しい土井市之進大佐を派遣。
- (2) 関東都督は中村寛大将で排袁行動助成論者。陸軍参謀長西川虎次郎少将、民政長官白仁武。
- (3) 外務省は石井外相一池局長が中心で、小池局長室は策謀本部の観を呈した。
- (4) 海軍一秋山真之軍務局長が中心。
- (5) 政党では政友会総裁原敬は、シナ浪人につきあげられる政府の動きに反対。

以上が栗原氏の叙述の、3月ころまでの要約である。上の点をすこし検討してみよう。政界・陸軍の大御所山県のをまずたしかめよう。山県の伝記に本件は全然出ていない。高橋義雄の『万象録』によると（1月26日）、

会談中公が嘆息して語らるるには、近來支那ゴロと称する者ありて、大竹貫一・内田良平など其重立ちたる者なるが、尾崎行雄なども其仲間と為りて種々運動を為し居る由、余の許にも種々脅迫の意味を以て文通する者、其幾人なるを知らず、内田良平など此際支那を分割すべしとの持論なるが（下略）

と、シナ浪人の策謀などをかなりよく見透しており、さらに、日本は1等国というがヨーロッパとは比較にならず、大戦の混乱期に中国領土獲得などというのは戦後に葛藤を残す、利益線のみを守り、袁が帝制を布こうと共和制であろうとどうでもよく、反袁も不得策、袁が倒れたならば次の主権者と謀って利益線を確保すべきだ、と述べている。ここでみるかぎり、辛亥革命当時よりは柔軟な考えである。

参謀本部の方は、栗原氏によれば反袁の策謀の中心であったというのが、どうであろうか。その中心の田中次長の考えをみよう。

田中は15年10月13日付で寺内に送った参謀次長就任挨拶状のなかで、中国問題について言う。

早速ナガラ急ヲ要スル問題ハ支那之帝制ニ対スル帝国ノ主義ヲ決定スル事ニ御座候。就テハ一兩日前陸軍ノ意見トシテ、適当ノ時機ニ帝制ヲ承認シ、尚ホ之ヲ援助スル意味ヲ以テ、我権内ニアル革命党及之ニ附随スル人物ヲ敢重ニ取締リ、若シ擾乱発生シタル場合ニハ帝国ノ自発的ニ我利権ヲ保護スル覚悟ヲ要スルト云フ主張ヲ陸相ニ交渉シ、陸相ハ右ノ主張ヲ持シテ昨日ノ閣議ニ臨ミ、大体ノ根本ヲ確定スル筈ニ御座候。尤トモ預メ擾乱ノ為メニ日本ノ利益ヲ侵害セラレザル様ノ注意ヲ望ム旨ノ意味ヲ通告スルコトヲ併セテ提議スル筈ニ御座候。

とあり、翌16年2月7日にも寺内に対し一般政情を述べたのち、

川嶋ノ書面ハ小生方ヘモ同一ノ書面参リ居リ候。元帥ノ方ヘモ同様ニ存候。乍去満蒙ニ事端ノ発生スルコトハ萬々有之間敷ト被存候。

蒙古ノ方ハ多少ノ事ハ已ヲ得ザル儀ニ有之、又大局ニ大ナル影響ハ無之事ニ存候。要スルニ川嶋等ハ何トカ肅親王ヲ日本扶掖ノ下ニ起タシメタク運動致シ居リ候得共、未ダ其時機ニハ無之ノミナラス、甚タ覚束ナキコト、被存候。乍去幾重ニモ御来示通り注意ハ可致候間、御安心被遊度候。

すなわち、1915～6年の交において、参謀本部は満蒙工作にあまり熱心であるとはいえないのである。そこで、もうすこしさきをみておこう。同じく田中の寺内宛書翰で、16年2月15日には「袁世凱モ帝政ヲ急ギタル結果、近来人心少々離反シ、彼ノ腹心ト思ヒ居リシ者迄忒心ヲ抱ク様ニ相成、形勢ハ全ク樂觀ヲ許サザル狀況ニ御座候」といい、袁の辞職まで考え、「此処数週間ニテ大勢ノ見込相立チ可申」、根本方針を立て、以後は情勢の変化に対応する外ないと本日外相と相談した、と述べているし、2月17日にも「支那ノ状況モ段々僥倖ニ相成候間、此際断然タル方針ヲ決定シテ、状況ノ推移ヲ指導スルト云フコトハ日一日ト切迫シ来ル様ニ被存候」と述べている（「以上寺内文書」）。

このような資料をみると、田中はあまり積極的でない。第1、山県が警戒的であり、寺内正毅朝鮮総督も同様である情勢下に、このような策謀が参謀本部の強力な後おして行なわれるはずがない。しかも、この1月21日に袁世凱は帝制延期を通告し、3月22日には帝制をとりけしている。この間の3月7日に、閣議が袁排撃・民間有志の南方援助黙認を決定したことは、まことに奇怪といわねばならない。その裏面には、山県が2月はじめより腸カタルで重態を伝えられるという事情もあり、あるいは大隈首相が還元問題で貴族院の総攻撃に会い、山県にすがって議会終了後辞職することとひきかえに、貴族院をなだめてもらったこと、従って田中らは寺内出馬の工作をすすめていたことも考えられる。このようなとき、満蒙問題にもっとも積極的であったのは、第2部長の福田雅太郎である。福田は14年3月に部長に就任、次長の田中が15年10月4日、上原が参謀総長になったのは12月17日であるから、福田の躍気運動を、大した効果はないと思いながら、黙認していたとも考えられる。なお、上原の考え方は、伝記には大隈内閣の外交政策反対とのみあって、本事件にはふれていない。

要するに、栗原氏が、参謀本部が擧事にもっとも熱心であったといわれるのは疑問であり、福田や小池あたりの強硬路線が閣議決定に影響したとすれば、大隈改造内閣の無能ぶりをまざまざと示していることとなる。⁵⁾ また、閣議決定で外交は外務省で統一して行なうとうたっているが、石井外相の手腕も疑われざるを得ない。

なお、政党方面では、原の考えは既述のとおりであるが、国民党の犬養もまた、疑問視していた。『万象録』では、2月10日に犬養は日本が袁に帝制中止を申入れたが、袁はタカをくくっているといい、「日本が満洲方面其他に於て往々故意の事難を構へ、帝制妨害の手段を講じ居るは袁の十分承知し居る所なれば、其日本政府に対する悪感情は益々増大」と語っている。しかし、反政府・対華軟弱論には政府の外郭団体である国民議会在が脅迫的に圧力を加える（『原敬日記』）という情勢下に、政党側の慎重論は実現の可能性が少なかった。

2. 方針の転換

3月7日の閣議決定で、まず中村関東都督が、在満各機関に排袁行動助成を通告するという勇み足があり、異議各所におこり、矢田総領事の提案の、張作霖を暗助して目的を達する方が体裁もよろしいという説を石井外相・田中次長も同意する。ここに奉天側領事は張を援助し、旅順側（都督）は土井の工作を延期したものの、奉天側の張工作阻止に動き、小磯はハルサップ工作をすすめ、土井も6月中旬に拳兵計画を立て、さらに内田良平が朝鮮にあらわれて対張強硬策をすすめるという、まことに複雑奇妙な情勢は、栗原氏の叙述に譲る。とにかく、政府が援張方針に変更すれば、福田一小磯の線は張暗殺を実行する（5月27日、失敗）というように、「外交の統一」は一片の空文と化している。

そのころ、すこしアセリ気味の後藤新平は、寺内内閣出現をめざして歓を通じ、下工作を怠らない。4月4日に政府の無策を攻撃した書翰を寺内に送り、袁の帝制中止に言及して、

政府は袁を助けざるのみならず、討袁の爲南都を助け居候。又久原、大倉等ニ南軍へ資金供給をすすめ居候哉ニ伝聞仕居候。元老諸公黙認之姿ト申事者如何ニも不安神ニ御座候へとも、微力如何とも致し難く、傍観連中ニ人リ、徒ニ痛嘆罷在候

といい、5月1日にも「支那に対する政策は万々失敗に相違無之」、政府は行懸り上、いかに善処するか、と訴える（「寺内文書」）。

いっぽう田中も4月9日に寺内に書翰を送り、「大体ニ於テ今日ノ勢ヒ袁ヲ支持スルハ不自然ニシテ却テ事件ヲ紛糾セシムル結果」となるといい、袁の策謀を嘲笑して、彼は中国第1の統治者でないと極言する。そしてイギリスの共同調停申込み意図を「日本ハ支那ノ内政ニ干渉スルノ意ナキヲ以テ体面ク謝絶」したと、得々と語る。

ところが、福田を中心とする参謀本部の策謀をかぎつけたのか、寺内が参謀本部に抗議するのは4月のことである。栗原氏が、4月2日に伊集院彦吉駐華大使が援袁策に抗議し、寺内も同様見解を軍に申入れたらしいとされているのにあたる。4月4日、田中が山県に報じたのは中国本土の模様らしく、「我政府カ支那浪人ヲ使噉シ支那ヲ騒乱、紛擾ニ苦心之際外国之占利ニ敏捷ナルニハ一驚ヲ喫シ候」とのみ述べている。しかし、山県は入江秘書官を通じて田中に注意したらしく、田中は、梁士詒とも無関係、張勳も利用していないから安心されたいと述べている（「山県文書」）。

寺内は立花中将や山県伊三郎總監を通じて上原に注意を与えたが、上原は4月23日付で「唯御申聞ノ件逐一肯綮ニ適シタリト服膺シ能ハサルハ勇作之太タ遺憾トスル所ニ有之候」と、上原としては庇護者寺内に対してすこぶる激越に反論し、遠隔地のこととて事情がお分りにならないのであろう、「又田中中将云々ニ対して之御云為ハ甚タ心外トスル所ニ御座候」（「寺内文書」）と、これまた非常の激昂ぶりである。内容が中国本土工作か蒙満工作か、いますこし検討の要があるが、次の田中書翰などよりして後者をも含むと思われる。⁶⁾

5月6日の田中の寺内宛書翰（「寺内文書」）は、「袁ノ境遇ハ最早凌ギ難キ難路ニ遭遇して救済の方法もないといい、「宗社党問題等モ他日ノ問題トシテハ（傍点は書込みの部分）今日ノ事ニ念頭ヨリ取り去り候方適當ノ様ニ被存候」と述べる。ついて論調を一転し、

茲ニ小生トシテ甚ダ遺憾ニ存候儀ハ、今回ノ対支問題ニ関スル仕事ハ小生隠微ノ間ニ総長ニハ知ラセス隠謀的ニ行ヒ居ル様に被思召、又此趣ヲ以テ総長ニ閣下ヨリ御注意ヲ与ヘラレシ由、（国家の政策に陸軍が統一をとってすすむべきはよく銘記している）、然ルニ隠謀的ニ国事ヲ弄トシ、不軍紀的ニ陸軍首脳部ノ業務ヲ執ルモノト思召サレ候様

ニテハ実ニ心外此事ニ御座候。

と開きなおり、上原総長も御注意を不快に感じている、政府の政策に基き、陸・海・外3省は統一の行動をとり、参謀本部は独走していない、とムキになって抗弁する。

さらに6月9日（この6日に袁世凱死亡）には、「閣下ノ対支問題ニ関スル御主旨ハ嘗テ袁世凱保持ニ存セン事ハ承知致居候得共、今日ノ勢今更手ヲ反ス訳ニモ不参」、現在の閣下の御意見を承りたい、とまで述べている（「寺内文書」）。以上の史料から、寺内が満蒙における成功の見込み薄い策謀の裏面に田中がありとみて、山県・上原を通じて嚴重な警告を発し、上原・田中がそれを否定した事情が明らかである。

もっとも、これは寺内に対する田中の反抗ではなく、これらに平行して田中は大陸の動向や次期政権にかんすることを述べており、かつて山本内閣が倒れたとき、寺内は出馬を予想して田中に政策の立案を依頼するほど田中の政治性は承知し、いづれ大陸の次に自分が政権をとれば、また田中の働きに期待しなければならないのである。だから、ここでは次期政権への地均しとしても、与論に対して陸軍が政治に関与し、あるいは独走しているという感じを与えることを惧れたのではなからうか。

いままで述べたように、陸軍は山県、寺内の両巨頭が策謀に反対であったとすれば、拳事については、参謀本部では福田とこれをめぐる大陸派の軍人（予備役を含む、彼らが川嶋に連なる）、さらには政府そのもの、とくに大隈—石井—小池の線を重視しなければならないし、大隈をとりまく有象無象の存在が、案外無視できないこととなろう。その1例として、松平康国が熊本から大隈に発した電報が（4月20日着）、後述のところで併せて注目をひく。いわく、「吾等の計画変改あらば大事去らん。吾等も覚悟あり。確かり願ふ。断じて行へば著宿（鬼神の翻文誤りか）も避く」（「大隈文書」B3021号）。

3. 拳事の中止

6月6日の袁の死亡によって、目標を失なった政府は、政策を転換して、後任の黎元洪を支持することに決定。福田・秋山は中央から遠ざけられ、7月中旬には満州の特殊部隊（策謀部隊）の解散を決定する。川嶋浪速らは政府の決定に服せず、石本貫太郎大連市長を黒幕として長春奪取計画をすすめるが、中央から強行的に中止させる。いっぽう、ハルサップは7月に入って行動をおこし、8月14日に郭家店を占領するが、8月30日に川嶋も断念してハルサップを慰勞する。ここに蒙古騎兵隊の撤退が決定、日中両軍の監視下に撤退するが、9月2日に朝陽事件がおこる。また8月13日には日本軍と奉天軍の衝突した鄭家屯事件が起る。これらの経過は栗原氏の叙述に譲る。

当時大連に着いた永井柳太郎は、押川に会って該地の状況を7月28日付で下のごとく大隈に報じた（「大隈文書」B2344号）

大連に於て押川方義先生に面会致し、大隈内閣の宗社党に対する計画一通り聴取仕候が、南方革命党に対すると等しく、孰れも目的を貫徹する迄思ひ切ったる応援を与ふるに至らざりしを遺憾と存候。就ては南方革命党と云ひ宗社党と云ひ、今後の始末は実に困難なるべく、殊に宗社党之川嶋浪速に属する団体は、大隈内閣にして宗社党の再挙に際し、必ず声援すべき約束を与へざるに於ては死を以て其志を徹かんとする覚悟を有するが如く、既に過般福田中將之満州通過に際しても、之を宗社党の活動に対する妨害者として途中に要撃せんとする計画者も有之候由、若し従前に於ける大隈内閣と宗社党との関係か、無分別なる人々の一時の怒に由り世上に曝露するが如き事あらば、反対党に大隈内閣攻撃の好材料を与ふべきは申上くる迄もなし、列強之日本に対する猜疑心は其

極に達し申すべく、閣下の御迷惑も一方ならざるべしと憂慮仕候。然かし幸に押川先生は最も能く閣下を解し、又川嶋浪速等とも親交有之、閣下之経綸の雄大なるを川嶋等に説くに最も宜敷く、川嶋等之心事の高潔なるを閣下に伝ふるに最も好適之人物に有之、公正ニ大隈内閣と宗社党との間に立って苦心惨胆致居候。故に先日押川先生より宗社党後始末に就き、閣下に申出候按件は頗る重大なる性質を有するものとして十分考慮致すべきやう、陸軍及外務当局者に御下命下され度、事態容易ならずと存候に付、特に一筆して尊慮を煩はし奉り候（下略）

上の書翰で、大隈内閣、とくに大隈と宗社党との関係に鑑み、大隈がかなり激励を与えたいことは読みとれるのである。おそらく大隈はこの種情報に驚き、責任回避策を考えたはずである。

以下、解散にさいして、今までの経過をのべた押川方義の大隈宛8月5日付書翰をしめておこう（「大隈文書」B362号、圈点は山本）。

拜啓仕候。先日之御電命ニ依り今日ハ只柴氏之来著ヲ待テ政府解決ノ方策ニ付、当地ノ川島初メ有志ヲシテ其ノ案ニ服セシメ、兎ニ角解決ノ上帰京仕度、同氏ノ来連ヲ待チ居ル次第ニ御座候。

滿蒙拳事ノ件ニ付テハ、川島手筋ノ者ノ外、石本ニ於テモ多年ノ計画ニ基ヅキ、之レハ専ラ蒙古ニ於テ事ヲ拳ゲントソレゾレ準備ヲ調へ、別紙作戰方法ニ基ヅキ方ニ事ヲ拳ゲントスル当夜、何等ノ予告モナク長春領事官ニ於テ警察及日本軍隊ノ威力ヲ以テ之レガ中止ヲ命ジ、之レヲ無理ニ解散セシメントシタル為メ、石本ニ於テモ面目ヲ失シ、其ノ信用全ク地ニ落チ候姿ト相成リ、身体茲ニ^(進退)窮リ、或ヒハ部下八十四名ノ日本人ヲシテ各自白装束ヲ為シ、割腹シテ其ノ申訳ケヲ為ストカ、或ヒハ自分ガ領事ト差違ヘ死スルトカ、或ハ暴徒ノ起ルニ任カセ、彼等カ其ノ夜領事館ヲ包圍シテ爆彈ヲ投セントカ、種々ナル苦策ノ間ダニ其ノ夜ヲ明カセシコトナルガ、元來ガ政府ノ許諾ヲ得テ着手シタル事トハ云ヘ、今日政策ニ変更ヲ生ジタル折柄(對滿蒙政策)、斯カル事ヲ為スハ、仮令自分等ノ面目ヲ立ツルコトヲ得タリトテ、日本国家ノ不利トナルヤモ知レズ、殊ニ侯爵ノ政策ヲ阻害スルコトアリテハ相不濟トテ、一時ハ涙ヲ吞デ之レヲ忍ブコトニ相成候ヘ共、後始末ニ就キ非常ノ困難モ可有之、其ノ他筆紙ニ尽シ難キ事情モ有之候ニ付、彼レハ明日ノ便船ニテ上京スルコトヲ勸誘シ、後始末ハ其ノ実弟ヲシテ衝ニ當ラシメ、領事ヤ守備隊參謀部ヲシテ其衝ニ當ラシムルコトト致シ候モ、石本ハ元來無口ノ方ニ候ヘ共、中々ノ不言実行家ニ有之候事ハ侯爵ニモ御承知ノ事ト奉存候間、同氏參伺仕候節ハ御含ミノ上、可然御慰メ置キ可被下候。川島ト云ヒ石本ト云ヒ、拳事ノ方法ニ就テハ異ナル処アリト雖トモ、其ノ精神ニ於テ一ニシテ、畢竟日本国家ノ大策ヲ案仕シ、北方ノ大国防ニ資センガ為メノ計画ニシテ、亦タ川島ガ頼ミトシタル肅王ハ、清朝復辟ノ忠魂ニ基ヅキ思念シタル計画ガ、理由如何ナルコトアリトスルモ、此ノ際時期ヲ過ラシメンガ為メニ、遂ニ滿蒙獨立ノ実ヲ拳グルコト能ハザルニ至リシハ、遺恨骨髓ニ至レルハ、身ヲ以テ彼ノ地位ニ置ケバ洵ニ同情ニ堪ヘザル次第ニ御座候。多事多端ノ折柄ニ候ヘ共、滿蒙ノ件ハ処置ヨロシキヲ得ザレバ、敵党ニ對シ政府攻撃ノ為メ、屈強ナル利器ヲ与フルコトト相成候テハ、洵ニ遺憾ノ極ニ御座候間、侯爵ノ政策ヲ重ンスルト同時ニ、当地ノ現状ニ鑑ミ、成ルベク最善ノ法ヲ尽クシ、解決ノ道ヲ得度ク苦慮罷在候。兎ニ角政府ヨリ決定案ヲ柴氏ニ於テ携帶來連致スべく、其ノ日ノ一日モ早カラシメテ大望仕候。川島・石本両氏ノ関係事項に就テハ、帰京ノ上親シク言上仕ルベク奉存候ヘ共、今回石本ヲシテ出京セシメ候ニ付、同氏着京ノ上ハ必ラズ拜謁ヲ願ヒ可申奉存候間、其ノ節ノ御参考

迄ニ右申上度、如斯御座候、 勿々敬具
 大正五年八月五日 大連大和ホテルニテ
 押川方義

大隈重信殿閣下

○大正五年八月五日正午大連大和ホテル石本貫太郎陳述聴取書

○拳事の基因

抑々拳事ノ起リハ第一革命ノ時ヨリ手ヲ付ケ始メタルモノニシテ、真ノ理由ハ吾ガ日本帝国ノ政治ハ開辟以來帝政ニシテ、支那ノ政治モ亦タ古来ヨリ帝制デアル。然ルニ支那ノ国民性ハ最も恐ルベキ激ゲシキ個人的社会主義ヲ旨トスルモノナルガ故ニ、万一此国ノ政治一朝ニシテ共和政治ニ変体センカ、只ニ支那ノ為メニ不幸ナルノミナラズ、率テ隣邦ノ吾ガ帝国ニ如何ナル国災ノ波及シ来ランヤ知ルベカラズ、之レ由々敷大事也ト思フ。故ニ遂ニ支那ハ共和政治ヲ敷クコトトナツタノデアル。

茲ニ於テ自分ハ先ヅ吾ガ帝国ノ安固ヲ念フ心ヨリシテ支那ノ共和ヲ打破シ、再ビ清朝ヲシテ帝政ヲ取ラシメント志シ、先ヅ蒙古ノ那郡王ヲ始メトナシ、各王ニ説クニ支那カ共和政治ヲ可トシテ歲月ヲ送ル内ニハ、貴王等ノ土地ハ召シ取ラレ、給与ハ断ゼラレ、洵ニ悲惨ナル境遇ニ沈倫スルコトハ必定ナレバ、今ノ内ニ清朝ヲ復辟シ、貴王等ノ地位ノ安固ヲ計ツテハ如何ニ

ト呉大札布ナル者等ヲシテ専心説カシメタルニ、幸ニシテ那郡王ヲ始メトシテ七王ノ賛成スル所トナリ、一方西チヨレト王ノ土地ヲ抵当ニ荻千春ナル者ヲ送ツテ洋銀三万円ヲ貸シ与へ、亦タ一方那郡王ノ土地ヲ抵当ニ大借款ヲ起サシメ、茲ニ大ヒニ清朝復辟ノ準備ニ取り掛ツタノデアツタ。

那郡王土地抵当ニ借款云々ノ件ニ関スル一切ノ書類ハ外務有シアリ

昨大正四年六月ニハ呉台札布ヲ同伴上京シ、大隈首相・加藤外相・小池政務局長ナトニ新シク面謁シ、此ノ拳事ノ談ヲ進メシニ、非常ニ賛成セラレ、又一面田中參謀次長(注、當時ハ參謀本部附)ニモ面会シテ、具ブサニ事状ヲ陳述セシニ田中次長曰ク蒙古各王ニ左様ナ連絡ヲ取ラレシハ何ヨリモ結構ナコトダ、他日国家ノ大事ニ必要アルベク、其ノ連絡ヲ固メ置カレタシトノコトデアツタノデ、自分ハ大ヒニ勇ミ喜ンダノデアツタ

○支那政局ノ変化ト拳事ノ進展

斯クテ袁ノ私暴ヨリ支那ハ一大政争が起ツテ来タ。自分ハ此ノ時コソ多年ノ宿望ヲ達スル時ナリト思ツタノデ、先ヅ蒙古王許リデハ名分ガ立チ難ヒノデ、清朝皇族ノ同意ヲ得ベク、荻千春ヲシテ運動セシメシ結果、醇親王ニハ非常ニ喜ビ、且ツ大賛成セラレタノデアツタ。ソレテ此ノ拳事ニ対スル清朝復辟スベク委任状ヲ一等伯郡榮勳ニ与へ、茲ニ第一ノ拳事根底成リ、統デ各地ノ連絡ヲ図ルベク、北ハ朝陽ニキョケイタイ吉林長春方面ノ旗人ヲ始メトシ、現在任官滿州出身ノ文武百官ヲ説キ、此レ等ノ徒ノ多クノ賛成ヲ得、一方伊通州ノ駐屯軍ヤラ南嶺ニアル機關銃隊砲兵ノ一部、長春方面ニアル巡警ノ一隊八百名許リノ大勢力、其ノ外南方各地ヤ馮・張將軍等ノ同意ヲ得タノデアツタ。

斯クテコルラス王地領分ニ発シ、懷徳駅ニ出デ、奉化鄭家屯等ヲ占領シテ、バブチャブヲ討伐セントスル呉將軍ノ背後ヲ突キ、而シテ北京ニ至タル目的ヲ進ミ、亦タ蒙古王ノ額公爺ハハイラルノ背後ニ進ミ、バブチャブノ兵力五百、已ニ巴軍ニ至ツテ居ルノデアル。

以上ノ如クニシテ各方面ノ連絡全ツタク取レ、一挙ニ火蓋ヲ切ル迄デニシテ今日ニ至ツ

タノデアル。

今現ニ挙事ニ従フ者

日本人 八十四名

支那人 六百名

今日ニ至ルマデ已ニ費用ヲ消費スルコト金十七万円也

デアル。

以上

すでに永井が述べたごとく、押川は比較的冷静に報じているが、彼らの国家発展策がいかなるものか、また政府要路のものが、彼らにかなりの言質を与えた模様などを知ることができる。このほか、「大隈文書」中には、満蒙にかんする数点の資料がある。かつての民権論者大井憲太郎は、8月13日付で満蒙経営私議を大隈に差出し（B 784号）、満鉄が発起人となって経営方針をたて、政府は関東都督府と朝鮮総督府に諮議し、智識階級、財産階級に交渉して発奮経営にあたらしめ、満蒙は十数年を見通して満鉄経営調査会に成案を提出し、政府はその保護のもとに調査局員を任命し、着々実行に移せというにある。

また松平康国は8月18日付で鄭家屯事件に言及し（「大隈文書」B 291号）、帝国が満州をナマ殺しにする以上は、事件の発生は当然で、謝罪賠償では事はすまず、根治策は(1)租借を断行するか、(2)自分の宿論である独立の形式をとるよりない、と強硬策を進言する。内田良平は8月30日付（「大隈文書」B 666号、ガリ版刷り）で、従来平静であった居留民も、鄭家屯事件では大いに激昂しているとして、鄭家屯・バインタラ・洮南・大連・開原・遼東の日本人団体の激昂の模様を報じている。鄭家屯は「果断ノ解決」を求め、バインタラは「従来我軟弱外交ノ輕侮」に原因すると訴える。

こうして21カ条要求以後の大隈内閣の外交政策の無責任・拙劣は、ますます日中間のミゾを深めてゆく。

おわりに

以上、なるべく多く未発表資料を示したかったので、所論が制限されざるをえなかったが、要約的に述べると、次のようになろう。

まず、陸軍、とりわけ参謀本部の策謀は、きわめて限られた範囲のものであった、ということである。大御所山県と、その後継者寺内の賛同をえずして、かかる陰謀が軌道にのるはずがない。それが、ある程度は田中次長が見て見ぬふりをして、しかもあまり大した期待もせず、一任していたということは、下級者の陰謀（さらにいえば、後年の陸軍の下剋上）のハシリともいうべきであろう。しかし、高山や土井の動きは参謀本部の命令によるので、参謀本部の干渉そのものは否定できない。山県や寺内、田中の陰謀かと疑がったのは、このような陸軍の統一を破る風潮への反撥であろうし、それよりも重大なことは大正政変で端的に示された陸軍に対する世論を警戒し、寺内出馬のさいの障害を作らなくなかったからであろう。

第2に、この挙事を実行にふみきらせた大きな原因が、大隈内閣それ自体にあると思われる。とりわけ、大隈一石井外交と、それを何ほどか支えている、大隈周辺の大陸政客の力が無視できない、ということである。筆者は、大隈外交の実体を、この視角から考察することは、重要であろうと考えている。大隈内閣、とくに改造内閣における大隈の無責任さと、権力にとりすがり、現実的な政治感覚を喪失しながらも権力をふりまわし、自分こそ国家を背負うものだという老人特有の自負をもち、実行力は足らず、責任がかかりそうになれば、極力回避するという態度が、いかに国際威信を失墜することであろうか。この

事件においても、早稲田系の大陸政客が、つねに大隈に傷がつかぬことを念頭において、憤懣を抑制しつつ、秘密裡に処理したから、内閣はこの事件で、大して傷つくこともなかった。しかし、反大隈の後藤新平は怪文書をまき散らしていたし、次の寺内内閣下で、尾崎行雄が後藤の怪文書を追及して、かえって後藤から、その対華態度を逆襲されたことは周知の事実である。

このようにみると、この事件は、体制側の分裂の様子を顕著にみせるものであり、その限りにおいて、対外政策の混乱は、なお当分続くこととなるのである。

注

1. 栗原健「第1次、第2次満蒙独立運動」（『日本外交史研究』大正時代所収、のち「第1次、第2次満蒙独立運動と小池外務省政務局長の辞職」と改題し、同氏編『対満蒙政策史の一面』に収載）。
2. 拙稿「第1次山本内閣の研究」（『史林』50巻の5）
3. 井上清「軍部の形成」（『人文学報』第28号）
4. 本事件は対華21カ条、大浦事件、非立憲的居挂りに反対した政友会院外団に連なる青年の犯行である。詳細は『日本政治裁判史録・大正』参照。
5. 老令大隈首相の無責任さは、御用記者の徳富蘇峰が忠義顔に山県にしばしば書き送って訴へ、ついに内閣はその日ぐらしだとまで述べていることでもわかるが（山県文書）、蘇峰をまつまでもなく、80歳近い大隈を首相にしたことが、日本の悲劇であった。かつ、大隈のもとには、無責任な人物の情報がまい込み、大隈はこれらある程度信用していたのではないかと思われる。例えば杉山茂丸は2月1日付では、現今の状況は袁の策謀であり、閣下はあくまで留任せよといい、2月17日の松本君平の書翰（望月小太郎宛）は、南方派は前の革命にもまして勢力あり、日本の援助を感謝し、日本に信頼する傾向にあり、逆に反英の空気が強いと伝えている（『大隈文書』317・302号）。このようなグループを早稲田派と称してもよいと思う。のちにも若干の資料をあげる。
6. 西原亀三の回顧録『夢の七十余年』には、親戚すじの土井大佐が挨拶もせず朝鮮を通過して満州に行ったので、クサイとにらんだという。

Summary

The Sceond Manmō-Kyoji, the Mansyū Mongorian independent movement in 1916, has hitherto been studied chiefly on the diplomatic documents and Naniwa Kawashima. This article, however, explains that, from the movement of the upper classes in the army and the movement of Shigenobu Okuma cabinet and its surrounding Japanese politicians taking interest in the continental affairs, its army couldn't be always positive by the reason why they couldn't and its cabinet conducted a foreign policy under what kind of conditions.